

シリーズ連載

風を起こす <第47回>

この町の人が好きだから

東川町 写真の町課
文化ギャラリー 学芸員

吉里 演子さん

価値観が多様化する現代、何を大切に思い、どこに幸福を感じるかは人それぞれ。経済的な指標だけでは、人生の満足感をはかることはできない。物質的な豊かさという点では地方より都会のほうが^ぶに分があるが、だからと言って皆がそこに魅力を感じるわけではない。

高校写真部にとって甲子園

全国の高校球児が目指す甲子園は兵庫県西宮市にある球場だが、高校写真部の生徒たちにとって甲子園は北海道東川町のことを指す。雄大な大雪山国立公園を望むこの町は、日本一の高校写真部を決める「全国高等学校写真選手権大会」が開催される聖地なのである。たかが写真と侮るなかれ。通称「写真甲子園」で知られる大会では、高校野球にも負けない熱戦が繰り広げられているのだ。「26回目となる今年は全国から500校の応募がありました」

そう話してくれたのは東川町写真の町課・吉里演子さん。自身も写真甲子園に出場した経験をもつ。高校3年生だった2005年、選手として憧れの舞台に立った。それは同時に、故郷から1000km以上離れた東川町に移り住むきっかけとなった。

東川町に行った人にしか分からない世界

大阪市立工芸高校の写真部に所属していた吉里さんは、写真甲子園に対してどこか冷めた見方をしていた。出場を目指し作品制作に没頭するあまり、ボロボロになっていく先輩たちの姿を目の当たりにしていたからだ。

【よしごと・ひろこ】

大阪府出身。中学生の時、姉の学校の課題制作に同行したことがきっかけで写真撮影を始める。2005年、大阪市立工芸高校3年生の時、写真甲子園の本戦大会まで勝ち進み、初めて東川町を訪れる。「We Love 北海道」と題した作品は優秀賞を受賞。大阪芸術大学写真学科に在学中も写真甲子園のOGとして毎年東川町を訪れる。2010年に大学を卒業後、臨時職員を経て東川町に入庁。以来、写真文化を通じたまちづくりに力を入れる同町の学芸員として、さまざまな業務に取り組んでいる。

出場できるのは1校につき1チームのみ。

3人1チームとなり、まず8枚の組み写真を応募する。この初戦を突破すれば、次は全国11ブロックの審査会へ。コマを進めた80校の高校生たちは、自ら作品のプレゼンテーションを行う。そこで選出された18校だけが、本戦大会への切符を手にするのできるのだ。

「先輩たちは身を削って作品制作に打ち込み、



受賞者に渡されるメダル



公開審査会の会場となった「東川町
農村環境改善センター」



今年は7月30日に開幕した写真甲子園。撮影した作品は毎日、公開審査会の場で評価される

時には激しく議論することもありました。『出場するには地獄を見ないかん』と言う先生もいて、『そこまでしなくちゃいけないのか』と。それでも出場できればまだいい。吉里さんが高校1年生の時、先輩たちは惜しくも出場を逃した。「あんなに頑張っていたのに...」。苦い印象が焼付いた。そんな心を動かしたのは、顧問の先生の一言だった——「東川町に行った人しか分からん世界がある。そういう世界を見てみたいと思わんか?」。

「その言葉に背中を押された気がして、挑戦してみようと決意しました」

同級生2人と共に、初戦の作品制作に取り組む日々。テーマは「ガード下」。授業が終わるとカメラを片手に撮影に出かけた。『写真、撮らせてもらっていいですか?』——大阪の下町で出会った人々に声を掛け、シャッターを切る。撮影後は暗室にこもってフィルムを現像する。

『自分が納得できる写真が撮りたい!』という思いで、毎日過ごしていました

努力が実って出場できた本戦大会は夏休み期間中の3日間行われた。出場校は同じ条件のもと毎日撮影し、作品は公開審査会で立木義浩氏をはじめプロの写真家らによる評価を受ける。そして最終日、総合評価の最も高かったチームに優勝旗が手渡される。

吉里さんにとって初めての北海道。全国から狭き門を勝ち抜いてきたライバルたちとの新しい出会い。大会を支える町民の方々の温かいおもてなし。

「写真甲子園で過ごした時間は、すべてがキラキラしていました。あれほど感情の振れ幅が大きかったことはありません。ちょっとしたことで楽しいと思えたり、審査員の先生の批評が厳しければ落ち込んだし、自分の中の全部の感情を使ったという感じでした」

優勝こそできなかったものの、生まれて初めて自分の手でつかみ取った経験は、何物にも代えがたい満足感をもたらした。

カッコいい大人たちの一員になりたい

その後、大阪芸術大学の写真学科に進学した吉里さんは1年生の夏、再び東川町を訪れた。写真甲子園のOB・OGボランティアとして大会をサポートするためだった。

選手係として分刻みで選手たちをサポートすることは想像以上にハードだった。そんな中あることに気づいた——「自分が出場した時、写真のことだけに専念できたのは、裏方で選手のために汗を流してくれていた人たちのお陰なんだ」。

「選手のことを第一に考えて、テキパキと仕事をしたり夜遅くまでミーティングをする役場や町の人たちの姿を見て、なんてアツい大人たちなんだろうと。『私もそういうカッコいい大人たちの一員になりたい!』と思うようになりました」。

目指すべき姿を見つけた吉里さんは翌年も翌々年も東川町を訪れ、写真甲子園を裏方でサポートした。町の人たちと一体になった

氣でいたが、ボランティアを受け入れるにも準備は必要なはず。「ボランティアってお客様なんだ」と感じ、「カッコいい大人たちと一緒に仕事をするには、ここに住むしかない」という結論に至った。

「まずは町の春夏秋冬を見てみよう」と思ったものの、夏以外の季節には写真甲子園という大義名分がない。卒業制作の時期と重なっていたことからテーマを「心のふるさと」とし、作品制作のためと、かこつけ東川町へ通った。

吉里さんの移住に向けた主なりサーチ先は町内に300戸以上ある農家。「東川町ってどんな町ですか？」——レポーターよろしく町の人に尋ねて回ると、たいてい一言目には「何もない町だよ」と返ってきた。だが、そこに続く言葉が印象的だった。「水はすごくおいしいよ」「だからお米もおいしいんだよ」「夕陽でピンク色に染まった山を背景に白鳥が飛んでいると、思わず作業の手を止めちゃうんだよね」。

「素朴な言葉だけれど、町の人が自分の言葉で町を紹介できるってすごいなって。私も自分の故郷は好きですが、受け売りの言葉でしか紹介できませんでしたから」

風通しの良い人間関係が心地いい

行けば行くほど町の魅力に引き込まれていった吉里さんは、卒業を目前に控えた2月、東川町に移り住んだ。町では大量の作品が寄贈されたことに伴い、専門的に収蔵できる

スキルをもつ人材を求めていた。学芸員の資格をもつ吉里さんは臨時職員として採用された。日中の最高気温ですらマイナスという極寒の季節。緯度が高い町は日が暮れるのも早い。運転免許を取得していなかったため通勤は徒歩。慣れない雪道は細心の注意を払っても滑ってしまう。

「やっぱり旅行とは違うな」——最も厳しい時季に一人暮らしを始め、寂しさを感じていた気持ちを元気にしてくれたのは町の人たちだった。

『ご飯どうしてるの?』とかいろいろ聞いてくれたり、『ご飯食べにおいで』とか気遣ってくれたり、まるで家族のように接してくれました」

人によつては「そんなプライベートなことまで…」と眉間に皺を寄せそうなお節介も、吉里さんにとつては心地よく感じられた。

「初対面の人から『ウチに上がっていきなよ』と勧められると、『出会ったばかりなのに大丈夫?』と私のほうが心配になるくらいです。でもそれは、町の人が他所から来る人に対して興味をもっていることの表れなんだなと」

東川町では1985年に写真の町を宣言して以降、国内はもとより海外からも多くの人が訪れる様々なイベントを開催してきた。それが他所からの人を受け入れる土台となったのだらうか。

「この町での人づき合いは、ほどよく入ってきてくれて、お互いに半開きの状態なんです。風通しの良さみたいなものが、信頼関係を

つくっているのかなという気がしています」

町の面積の約7割が森林という東川町にこれといった娯楽施設はない。街中がにぎやかな大阪とは対称的な環境である。移住前は「つまらないかも」と不安もよぎったが、実際住んでみると「空気感や規模が自分にすごく合っている」と感じた。

「都会では物があふれ過ぎていて、何を選んだらいいか困ります。何でもあるはずなのに、自分の欲しい物が選べない。でも、東川町のセレクトショップに行けば、お店の人の顔が見えて、その人がこだわりをもつて選んだ物だと思うとすごく安心して選べます。だから、少しの物でも満足できる」

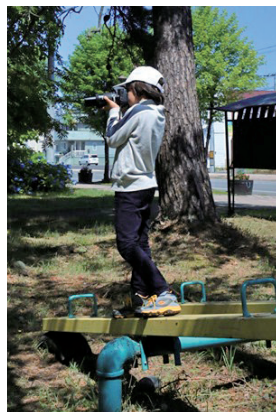
「物の多さ＝満足感」ではないのだ。

町の人にも写真を楽しんでもらえたら

2010年4月、吉里さんは採用試験に合格し正規職員として東川町に入庁した。配属先は町の文化ギャラリー。それまで町に不在だった「学芸員」という職に就き、写真の町を象徴する施設である文化ギャラリーの企画・運営などの仕事を担っている。

中でも力が入るのは、東川町が写真の町宣言をした翌年から毎年夏に開催されている国際写真フェスティバル。国内外のプロの写真家を対象とした「写真の町東川賞授賞式」をメインに、受賞作品展やシンポジウムが催される。今年で35回目を数え、「国内作家賞」「新人作家賞」の歴代受賞者の中には、今で

2013年に結成された「ひがしかわ写真少年団」。活動日には、カメラをもって撮影にでかける。子どもたちはそれぞれの視点で、被写体を見つけ、シャッターを切る。撮った作品は皆で感想を述べ合う



は大御所となった写真家の名も連なる。メイン会期中は写真愛好家の作品をまちなかに展示するストリートフォトギャラリー、写真と音楽を融合させたイベントも開催され、人口約8000人の町がその何倍もの人でにぎわう。

「写真家で知らない人はいないと言われるほど有名な国際写真フェスティバルですが、町の人の中には『町外から来る人に楽しんでもらうためのイベント』という意識も感じられましたし、『写真って難しいし、よく分からない』という声も聞かれました。でも、『そうじゃないんですよ』ということ伝えたかった」

町の人もっと気軽に写真を楽しんでもらおうと、他の職員と協力しながら、子ども向けやシニア向けのワークショップなど写真を身近に感じてもらう取り組みを続けてきた。

その成果もあるのか、ここ数年写真甲子園の「町民が選ぶ特別賞」の作品とプロの写真家が選ぶ作品が同じになることが増えてきた。それだけ町民の写真を見る目が養われ、プロの目に近づいてきているのだろう。

この町で必要とされる存在に

東川町に住み始めて4年目、吉里さんは町の人たちと一緒に「ひがしかわ写真少年団」を結成した。対象は小学生だけにするつもりだったが、地元中学校に写真部がなく、保護者の要望を受けて中学生も参加OKとした。団員は年々増加し、現在25名。月に2回集まって撮影に出かけたり、作品を評価し合っている。中学生が小学生の面倒をみるなど、写真を通じて子ども同士の新しいつながりもできた。

「子どもたちからは、毎回いろんなことを教わっています。それがすごく楽しい」

吉里さんには密かな夢がある。それは写真甲子園が始まって以来、未だ実現されていない「地元高校の出場」。隣接する旭川市の高校が出場した際、町はかつてないほど大いに沸いた。「これでもし地元高校が出場できたら……」——頭の中に町の人たちの喜ぶ顔が浮かんだ。写真少年団の中から将来、写真甲子園に出場する子どもが出てきてくれたら嬉しいと思う。けれども、それ以上に大事なことは「写真って楽しいんだな」と感じてもらうことだという。

「私にとって東川町は、『必要とされる存在になりたい』と思える場所です。町の人から必要とされて、自分もそれに応えていきたい」

写真甲子園に出場して以来、東川町には「頑張ったら自分に返ってくる」と思わせてくれたきっかけのすべてが詰まっている。その経験があるから単なる好きじゃない。

「私は大好きな町にずっと片想いしている感覚でいましたが、最近やつとちよつと見てもらえるようになったかな。これから両想いになって、この町のために何かしていけたら」

「この町の一番の魅力は、この町に住む人々——笑顔で言い切る吉里さん自身も、町の魅力になっていることだろう。」

取材・執筆／ライター 更田沙良